

曲亭馬琴『漢楚賽擬選軍談』翻刻（5）
-第二編その二-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2021-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神田, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21523

曲亭馬琴『漢楚賽擬選軍談』翻刻（五）——第二編その2——

神田 正行

凡例（摘録。詳細は本誌五三九号（平成31年）掲載の、本稿（一）参照）

- 一、仮名は一部を除いて、現行のひらがなに統一した。また、会話を示す「」や、句読・濁点などを適宜補った。
- 一、読み誤りのない範囲で漢字を宛てた。その際、もとの表記を傍訓で残したものもある。また、原本における振り仮名は、一部を除いて省略した。
- 一、本文には、内容にもとづいて適宜段落を設けた。また、話題が改まる位置に、内容を示す見出しを、◆印に続けてゴシック体で掲げた。
- 一、挿絵は本文の近い位置に掲げ、画中の詞書は同じ頁の下段に翻字した。
- 一、影印ならびに翻刻の底本は、早稲田大学図書館蔵本（ヘ133056。改装本）である。虫損や着彩、シミなどが目立たないよう、画像には最低限の修正を施した。

(四)

三の続きしつべし。その時伏せ勢をもて、取り込めて討つならば、生きて帰る者は稀なるべし。経久・兼通▼原作の李遇・韓章は斯様々々、才明は云々」と、陣屋の四方に手分けを定め、宵より士卒に多く、兵糧を食らはしめて、皆陣屋の四方に伏し隠し、敵の夜討ちに寄せ来るを、今かくと待ちたりける。

されば又源氏の兵は、皆敵を追ひ捨てて、もとの陣所に帰りにければ、義仲「項羽」諸将を招き集めて、「兼安【章邯】いたくうち負けたれば、皆魂を落とせしならん。今宵押し寄せて夜討ちをせば、兼安を生け捕るべし。これ逸をもつて労を討つ也。各々いかに」と問ひかけて、左右をきつと見返れば、軍師覚明【范增】進み出でて、「妹尾はいたく負けたれども、戦に慣れたる者なれば、今宵の夜討ちを測り知りて、伏せ勢をもて討たんとすべし。味方もかねて用心して、斯様々々に計らはず、彼方の伏せ勢たちまち乱れて、逃げ走らんこと必定也。その手分けは云々」と、機密をつぶさに説き示せば、義仲を

はじめとして、諸将喜んでその義に従ひ、腰兵糧の用意をしつ、亥中の頃よりうち立て、妹尾が陣へ寄せたりける。

その時義仲は、五千▲右の下へ／▲左の上より余騎を従へて、兼安が陣に押し寄せ、と見れば篝火を焚き捨てて、敵は一人もをらざりけり。「さもこそあらめ」と馬乗り据ゑて、鬨をどつと揚げさすれば、たちまち陣屋の左右より、合図の石火矢を放つ程こそあれ、右の方より次へ(16才)／難波の次郎経久、左の方より妹尾の太郎兼通、兵数多従へて、義仲の一軍を、おつとり籠めんとする程に、思ひがけなき後ろより、根井の大弥太行親▼原作では英布、楯の六郎親忠【桓楚】、軍兵数多従へて、どつと喚いて撃つてか、れば、経久・兼通驚き慌てて、馬の轡づらを引返して、後ろの敵を討たんとするに、前よりは義仲の先手の大将、樋口の次郎兼光、今井の四郎兼平、数多の軍兵を駆り進めて、喚き叫んで競ひか、れば、経久・兼通いよく慌てて、前後の敵に当たること叶はず、散々に討ちなされて、右往左往に奔走す。

さる程に、妹尾太郎兼安は、義仲本陣に攻め入りて、
 経久・兼通にとり籠められ、挑み戦ふ時に至りて、その
 後ろより襲はんと、かねて謀りし事なれば、才明と二手
 に分かれて、各々数千の軍兵を従へて、深く隠れてゐた
 りしに、敵に謀の裏を搔れて、義仲は軽々しく、陣門
 に攻め入らず、却つて経久・兼通は、敵に前後をとり巻
 かれて、いとも難義に見えしかば、兼安・才明●／●う
 ち驚きて、陣屋の後ろに現れ出で、やにはに経久・兼通



(16) 才巴、才明を捕らえる。

らを、救はんとする程に、後ろに鬨の声いたく起こり
 て、源氏の大将十郎行家【▼本来は行家が英布】、手塚
 光盛、鏗田忠政、各々数多の、軍兵を従へて、はや三方
 より討つてか、れば、兼安・才明が二手たちまち乱れ
 て、こゝを先途と戦ふたり。

かゝる所に城中より、戸樫介・林六郎【▼原作の趙王
 歇・張耳・陳余に相当】、木戸おし開きて撃つて出でて、
 兼安が横合ひより、面もふらず斬つてか、れば、兼安・

巴「囚らず手に入る親の仇を、女ながらも武運に叶

ひし、巴が□／□手並みを思ひ知つたか。

才（才明）「『傾城水滸伝』この方の強ひ○印へ／○

印より姉イだ。漢楚には、こんな代物はない筈

だが、これで『盛衰記』の筋にも、よく合ひま
 すく。

▼『盛衰記』の才（齊）明は、巻二十九で岡本成時
 に捕らわれ、巻三十三で義仲の命により、六条
 河原で斬首される。

才明度を失ふて、防ぎ戦ふ暇なく、捨て鞭鳴らして逃げ走る。大将かくの如くなれば、その手の雑兵あるひは討たれ、あるひは生け捕らる、者も多かり。されば経久・兼通らも、軍兵多く討ち取られて、やうやくに身を逃れ、西を指してぞ走りける。その時覚明は、敵に伏せ勢あらん事を思へば、早く揚げ貝を▲右の下へ／＼▲左の上より吹かしてこれを追はせず。やがて諸軍兵をまとむる程に、夜はほのぐと明けにけり。

かくて義仲は、林・戸樫に對面して、月頃の籠城を勞り、討ち取る所の首どもを突検するに、兼安・経久・兼通・才明はその内にあらず。就中才明は、権頭の仇也、「此度も彼奴を討ち漏らせし事、恨むべし」と、練り返しつゝ、息巻きたる、折から巴は人々に、少し遅れて

■中へ／＼■下より帰り来つ、義仲に申すやう、「妾は昨夜も、遊軍となりしかば、敵の落ち行くべき道にあり。かゝりし程に、平泉寺の長吏才明は、只一騎に討ちなされて、馬を飛ばし西を指して、走り去らんとしてけるを、妾横様につと出でて、馬を駆け寄せ遮り止めて、引組み

て生け捕り侍り。あれ見そなはせ」と言ふ程に、雑兵ら両三人、才明に荒縄かけて、目先近く引き据ゑたり。

義仲うち見て怒りに堪へず、自らその罪を責むるに、才明は頭垂れて、もの言ふ事もなかりけり。樋口・今井、巴らが為には、まさしく親の仇なれば、兄弟しきりに乞ひ申して、手づから頭を刎ねんと言ひしを、義仲急におし止め、「畜生に等しき曲者を、世の常なる仇討ちに等しく、汝たちが手を勞せんや。彼奴は錆びたる刀をもて、雑兵に討たせんこそ、なか／＼に快からん。疾く／＼」と下知すれば、一人の雑兵心得て、いたく錆びたる刀をもて、才明が首を討ちければ、次へ(16ウ・17オ)／＼速やかに切れずして、苦痛言ふべうもあらざりけり。かくて才明をはじめとして、討ち取る所の首どもを、道のほとりに切りかけて、人馬の足を休めけり。

その後妹尾兼安は、しば／＼義仲と戦ひしに、義仲憤勇前に敵なく、堅きを碎き鋭を取り拉ぎ、およそ九度戦ふて、九度ながら勝ちにければ、妹尾は漸々に退きて、又越前まで追ひつめられ、遂に仙山の城【函谷関】に籠



(16ウ、17オ 才明、斬首される)

もりけり。

既にして義仲は、なほも進んで攻めんとせしを、大夫坊覚明諫めて言ふやう、「杣山は、聞えたる名城なるに、且兵糧も、乏しからずと聞ゆ。急にこれを攻め給ふとも、

兵(雑兵)「この焼け身は土手もの【粗悪品】で

ござりますすから、○／○よく切れる事ではござりませぬ。ごきくとやらかしませう。

才(才明)「漢楚」の孫勝は、項梁を突き殺しても、どうなつたことやら、後の事は知れかねるに、

『盛衰記』の筋に合はされては、おしまい〜。

今井「口叩かせずと誅伐々々。

巴「これから又妹尾めを、生け捕りたいものでござります。

仲(義仲)「今日のぶん取り功名は巴が第一。兼光も兼平も、さぞ満足であらうなア。

樋口「怨敵退治、我々まで、やうやく無念が晴れました。

速やかに落ちずして、却つて味方を損なふべし。思ふに宗盛【胡亥】は愚将也。酒に耽り色を好みて、政を長高【趙高】にうち任せ、国の大事に懸念せずと、世の風聞に隠れなし。又長高は能を嫉みて、己に勝れる物を憎む、烏譚の小人也。これにより兼安らと、睦まじからずと人は言ふ也。しばらく廬山の城を抑えて、敵の変を窺ひ給へ。その内乱の起るに及びて、一挙して攻め討ち給はゞ、あに廬山の城のみならんや。美濃・近江の城々も、刃に血塗らずして御手に入るべし。この義に従ひ給へ」と言ふ。理なれば義仲は、廬山の城を攻めず、敵の要害をとり縛りて、只遠巻きにぞしたりける。

◆長高、鹿を指して馬という

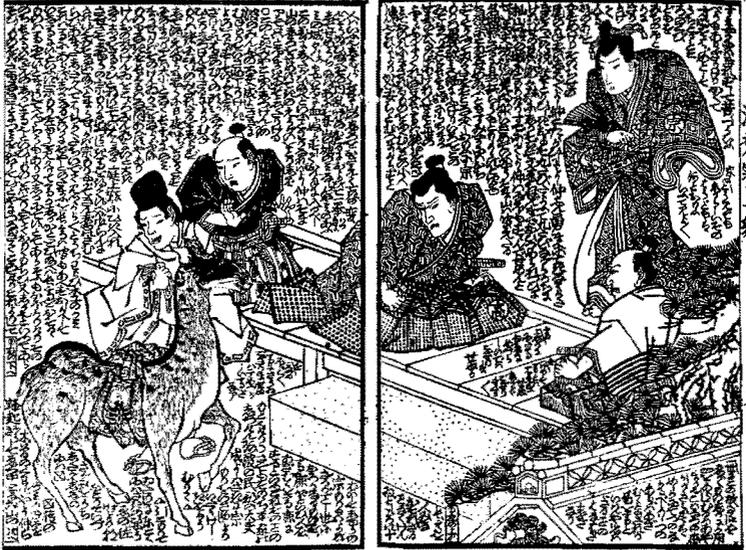
○この時都には執権の、阿波民部大夫成良【李斯】、先に宗盛を諫めしより、気色よろしからずして、いよく遠ざけられ、秦木工頭長高一入執権たり。さるにより宗盛は、諸国の乱れたるを知らずして、酒宴遊興に日夜を分かつたず、国の政は大小となく、長高にのみ任せしかば、その権威、肩を並ぶる者もなきを、長高は、なほ

飽かずやありけん、己が権威を試みん為に、いと大きな鹿を、馬飼ひ舍人して、六波羅なる、庭上に引き入れさせ、さて主の宗盛に、「珍しき馬を得て候へば、御覽に入れ候也。みそなはし給へ」と申せしかば、宗盛やがて近習の侍、数多従へて、端近くたち出でて、見つ、からくとうち笑ひ、「木工頭、これは馬にあらず鹿なるを、いかにぞや」と宣ふを、長高は、聞もあへず押し返して、「いな馬に候」と、言ふに宗盛左右を見返りて、「馬か鹿か」と問ひ給へば、長高を恐る、者は、「馬にて候」と、申して諂ふもあり、又「鹿にて候」とて、争ふも多かりけり。その後長高は件の鹿を、「馬也」と言ひし者をば、取り立てて重く用ひ、又「鹿也」と言ふて争ひし者をば、さもなき事に罪を負はして、獄舎につなぎて殺しけり。

○右の下へ

○左の上より長高を、人皆

恐れざる事なく、権威年頃に十倍して、主の宗盛も及ばざるが如し。世に愚かなる者を馬鹿と言ひ、人を欺くを馬鹿にするといふ、これその事のも也けり。



(17ウ・18オ 長高、鹿を指して馬といふ)

◆成良、死を賜る

さてもその後平家の執権、阿波民部大夫成良は、先に宗盛を諫めしより、いたく気色を蒙りて、▲／＼引籠りてゐたりしに、東国には前兵衛佐頼朝起こりて、伊豆・相模を討ち従へ、信濃には□／＼権守兼遠、木曾冠者

へ世にこの故事を描く者、鹿に角を、あらしむるは誤り也。こは夏の鹿か、さらずは牝鹿にて、角なかるべし。もし角あらば欺くとも、誰か是を馬と言はんや。思はざる事の甚だしきなり。

宗（宗盛）「どう見ても鹿らしい。その方どもは何と思ふ、言ふて見よく。」

近（近習）「決して馬とは見えませぬ。鹿でござりますく。」

高（長高）「鹿に似たる馬故に、珍しいではござりませぬか。」

近（近習）「なるほどく、馬に相違ござりませぬ。ハテ珍しい馬だなア。」

義仲ら蜂起して、越中戸波山の次へ(17ウ・18オ)／戦ひに、討手の大将、知度・飛驒・景高らを、討ち取つて七万余騎を、俱利伽羅谷に追ひ落とし、その後又討手の大将、妹尾太郎兼安、難波・桜間と共に、しばし兼遠・義仲と戦ふ程に、平泉寺の長吏才明が、偽りの謀りて、兼遠を討ち取るといへども、義仲さらにその兵を率ゐて、藤原宗義を誅伐し、再び加賀・越中に攻め入りて、兼安を討ち破ること九度、兼安らは越前なる、柚山の城に立て籠りて、都へ救ひの兵を、しきりに申し乞ふといへども、秦長高これを押さへて、主君に聞こえ上げざる由を、伝へ聞いていたく驚き、つひに通の、諫め文を書き認めて、主君のほとりに侍るなる、女房らにつきてこれを参らせけり。その書の略に、「義仲・頼朝、東北に蜂起せしより、東国の武士は、多く頼朝に従ひ、北国の城は名残なく、義仲に攻め落とされ、妹尾兼安、柚山に退き籠りて、加勢の軍兵を乞ひ申せども、長高これを押さへて披露せず。佞人時を得て、君の耳目を眩ます時は、その国滅びざる事稀也。早く長高が頭を刎て、

西国より、知盛朝臣・教経朝臣を呼び上し、頼朝・義仲を、征伐せしめ給はずは、ことの大事に及ぶべし。臣久しく、御目通りを遠ざけられて、愚衷を述ぶるに由なし。願はくは、臣が誠忠を賢察あらば、幸ひ甚だしからんとぞ書きたりける。

宗盛これをよくも見ず、○右の中へ／○左の上より巻き返しつ、かいやりて、「長高は当家の忠臣、年頃我を楽しましめて、過てる事ある由を聞かず。▲左へ／▲右

よりしかるをいはんや義仲・頼朝が、東国を討ち取りて、勝つに乗るといふ事は、いまだ聞かざる所也。はやく木工頭を呼ぶべし」とて、長高を召し近付けて、件の諫め文を指し示して、「阿波民部が云々の、一通を参らせたり。この事ありや、心得がたし」と問はれて、長高は件の□下へ／□上より書を、繰り返し見てあざ笑ひ、

「頼朝は石橋山にて、俣野・大場に討ち破られて、その後彼が行方を知らず。義仲は、その叔父兼遠を討ち取られて、再び頭を擡げ得ず。成良が申す趣は、某が知らぬ所、偽りなる事、分明に候か。察するに成良は、某が御



(18ウ・19オ 長高、成良を譏訴する)

意に適ひしを、嫉みて罪に落とさんとて、**次へ**(18ウ・

19オ) / この義に及び候ならん。つらく彼が、胸中を察し候に、先に云々の義によりて、君を御家督に立て参らせしを、成良己が功とせり。これにより、一国一城の主にもなさるべからんと、かねては思ひ候ひつらん、さる恩賞の御沙汰はなくて、却つて御前を遠ざけられ、垂れ込めてのみ候へば、君を恨み奉りて、よからぬ心の起こりしならん。さるにより彼が弟にて候、桜間介良遠【李由】は、義仲を、討手の副将に選まれながら、却つ

高(長高)「筑紫の守りは、御先代よりの御定め。

それを呼び返されませうか。此条目の趣は、

一円合点が参りませぬ。君を恨み奉る、心を含

みし諫めの文面、野心の証拠も、ござります

。

宗(宗盛)「聞捨てならぬ成良が逆心。事の大業に

ならぬうち、早く**○左へ** / **○右より**討手を遣は

さん。誰かある、疾く参れ。

て義仲に心を通はし、木曾に降参したりしを、成良深くおし隠して、討ち死せしと言はせし由を、告げたる者の候也。これらをもつて彼が心を、御賢察候へかし」と、言葉巧みに讒せしかば、宗盛これを真として、眼を怒らし齒を食ひしぱり、「扱は成良は逆心あり。早く切腹せしむべし」とて、矢野七郎高村「▼『盛衰記』巻三十三に見える」を誑使として、成良が宿所に遣はし、「阿波民部成良事、先代より第一の、執権職にありながら、源氏の残党、東北に起こりしを、討ち平らぐる事を思はず、却つてその同役たる、秦長高を讒言して、忠臣を害せんとす。只これのみにあらずして、成良が弟良遠は、逆徒に一味の聞こえあり。これにより成良親子に、死を賜ふもの也」と言はしめけり。

成良これを承りて、その子阿波太郎成時を見返りて、「古より、長臣の任重くして、恙なく、二代の君に仕ふるは稀也。只悔ゆらくは、我韓非子の学を甘んじて、刻薄をのみ旨としつ、数多人を殺せしかば、終にこの身に報へるならん。よしや理を述べ言葉を尽くしても、

申し訳をいたすとも、君暗うして佞人に、迷はされ給ふものを、いかでか言ひ甲斐のあるべしや。今はしも是迄也。最期を急げ」と励まして、腹かき切つて失せにければ、成時も「遅れじ」とて、共に腹をぞ切つたりける。

かくて矢野高村は、成良・成時が頭を携へて、六波羅へ帰り参りて、こと云々と聞こえ上げけり。長高その首を実検して、さらに数多の兵を、成良が宿所へ
 〇左の上より遣はし、その妻子眷属を、一人も漏らさず搦め捕らせて、七条河原に引き出だし、みな頭をぞ刎ねさせける。これより長高が勢ひ、六波羅を傾けつ、人皆いよく恐れけり。

◆宗盛、戦況を耳にする

〇かくて又宗盛は、美女熊野を寵愛して、筑紫琴をかき鳴らさせ、あるは舞姫らに舞ひ歌はせ、酒宴遊興をのみこととして、国の危うきを悟らず。ある日酒にやみ心疲れて、うた、寝してはせしかば、かたはらに侍る女房ら、近習の輩を見返りて、「いかに今日も北国より、早打ちはあらざりしか」と、問へば一人の△△近臣答へ



(19ウ・20オ 成良父子、切腹する)

て、次へ(19ウ・20オ) / 「さればとよ妹尾殿は、木曾にしはくうち負けて、柚山の城に逃げ籠り、しきりに加勢の、軍兵を乞ひ申せども、執権これをおし止めて、申す事を許さねば、君には知ろし召されずかし。今日も柚山より、早打ちの使ひは来たり、東国もさぞあらん。

兵「かあいさうだがしよことがない。サア尋常に
▲ / ▲腕回せ。

なる(鳴戸)「妻子の菩提を弔ふ事も、ならぬこの身も縛り縄。かゝる嘆きは前の世の、業か報ひか
■ / ■悲しやく。

時(成時)「大功むなしき非道の仰。みな長高がなす事と、思へば無念でござりますはいのふ。

成(成良)「喬木は風に折らるゝならひ。任重ければ責めも亦、よに軽からぬ主命に、○ / ○自殺の覚悟かくの通り。御上使見届け召されたか。

村(高村)「主親子の健気な切腹。御説なれば是非に及ばず。者ども鳴戸を引き立てよ。

げに安からぬ事にこそ」と、言ふを宗盛漏れ聞て、たち
 まちに頭を擡げ、件の近習を呼び近付けて、「只今汝が、
 言ひつる事はまことなるか。包まず告げよ、いかにぞ
 や。」と問はれて近臣涙を流し、「東国北国既に乱れて、
 注進櫛の齒を引くがごとく也。よりてこれを知らざる者
 なし。只君御一人のみ、 \blacktriangledown \blacktriangleleft いまだこれを知らせ給は
 ず。その故は斯様々々」と、こと詳らかに申すにぞ、
 下へ

●中より宗盛驚き吐息を吐きて、「長高呼べ」と



(20ウ 宗盛、戦況を知る)

て召されけり。

これより後の物語は、下帙の五の巻に具なり。

※左上 売薬広告

家伝神女湯 (婦人血の道諸病の妙薬) 一包代百銅
 近年薬種高直といへども、いよく薬種を選びて、功
 能を違はざらしむ。あへて利の為にのみせざれば也。
 精製奇応丸 (大包代貳朱 中包代匁五分) 小包代五分
 薬種を選び、製方を詳らかにし、分量家伝の加減を
 もつてす。よつてその功百倍神のごとし。
 熊胆黒丸子 (熊の胆汁を以丸す。多く糊をまじへず) 二包代五分
 婦人つぎ虫の妙薬 一包六十四銅、半包三十二銅
 つぎ虫はさら也、産後下り物の滞りに用て尤よし。
 製薬本家 (神田神明下同朋町東横丁) 滝沢氏
 弘 所 元飯田町中坂下南側四方の向 滝沢氏
 取次所 両国横山丁二丁目 大坂屋半蔵

(20ウ)

近 (近習) 「都も鄙ももの騒がしく、日毎の早馬注
 進状。今日も二度まで来たといの
 女 (女房) 「かうしてゐても胸安からぬ。 ● / ● 末

が案じられますはいいなア。

馬琴作 国安画 浄書金川

《第三冊 前表紙・同見返し》



（表紙）

曲亭馬琴著

和漢撮合／二編下帙

每篇八卷合本／歌川國安絵画

漢楚賽擬選軍談 壹

（見返し）

馬琴著 漢楚賽第貳編之參 國安画

酈食其・陸賈・隨何に擬ふ

壺岐莊二歴世、平判官 康頼が、

良主を得たる學術は

東軍陣法

あいきやうありける

かんそまがひ だいにへんのさむ

己丑孟陽 西村永寿堂刊行

章邯・董翳・司馬欣に擬ふ

妹尾兼安・兼通・難波経久が

讒者を避し降参は

北将捷軍

よころびありける

(五)

宗盛思はず近習きんじゆの者の、相囁まごきたる由を知りて、驚き給ふ事大方ならず、やがて秦しん長高を呼び近付けて、「只今かゝる事を聞たり。頼朝・義仲東北の、国々を討ち取りて、勢ひ大方ならずと聞こゆ。就中なか義仲は、妹尾いみず太郎をしばく破りて、はや越前まで寄せたるならずや。かゝりし程に兼安らは、加勢の軍兵を求めんとて、しきりに早打ちの使者を参らせしに、汝が抑えてこれらの由を、



(21才 宗盛、長高を責める)

聞こえ上げずと言ふ者あり。その身は当家の執権として、万よろづを預かり行ひながら、乱れたる世を押し隠して、太平也と言ひなせしは、そもいかにぞや」と息巻きて、まくしかけつゝ、責め問ひ給ふを、長高騒ぐ気色けしきもなく、「それは御説ごていで候へども、逆賊を討ち平らぐるは、大将たる者の務むる所、義仲を制しかねて、賊に勢ひを得させしは、妹尾いみず兼安らが落ち度也。されば又執権は、軍略の事に預からず、君の御過ごあやまちを補ひて、民に安堵せしむるもの也。そはとまれかくもあれ、兼安が早打ちの、使者をしばく参らせて、加勢の軍兵を、乞ひ申せしといふ事

宗(宗盛)「類稀なひなる忠臣と、□/□思ふたが□惜をしい。その陰日向かげひなたのないといふ、証拠があるか、どうじゃく。」

高(長高)「うたてや人の陰言かげごを、まこと、思し召さる、は、恐れながら若氣の御短慮。御心ごこころをしづめ給ひて、某それがしが申す由を、お聞きなされて下さりませ。」

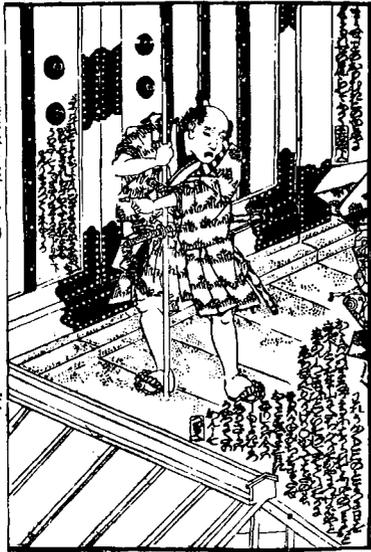
は、某つや、これを知らず。知りなば申上げずして、今日まで過ごし候はんや。全て斯様の事には、伝聞の間違ひあり。針ばかりなる事を棒の如くに、言ふはうき世の習ひ也。証拠もなきに風聞を、まこと、な聞こし召されそ。別に討手の大将を遣はされ、兼安らを召し返して、その罪を質し給はゞ、敵はさらなり。□右の下へ／□左の上より御家臣らも、御勢ひに怖じ恐れて、件のごときそゞろ事を、言ふ者はなくなるべし。驚き給ふ事かは」と、言ひくろめたる佞弁に、宗盛たちまち迷はされて、「さもあるべし」と思ひつゝ、酒宴はなほも止まざりけり。されば又長高は、一人つくゞ思ふやう、「袖山より兼安らが、加勢を乞ふ事しはゞなれども、日頃これを抑へて、その求めに應ぜざりしは、我を我とも思はざる、次へ(21オ)／彼奴らを敵に討たして、恨みを返さんと思へば也。しかるに兼安らは、我が披露せぬ由を知りて、主君のお側去らずなる女房を頼み、近習の者をこしらへて、件のお如く言はせしならん。かの折に我閉口して、言ひ訳をせずもあらば、兼安が為に謀られて、こよなき罪

を得つべきのみ。いと危うきかな危うかりし」と、腹の内にも思案をしつゝ、これよりして兼安らを、憎む事はじめに増したり。

◆兼通、都の内情を知る

○兼安はこれを知らで、その後も使ひを参らせて、しはゞ加勢を乞はせしに、日数経るのみその沙汰なければ、心しきりに苛立ちて、経久らと談合し、我が子妹尾小太郎兼通を都へ上せ、「戦の次第を聞こえ上げて、早く加勢の軍兵を、乞ひ申せ」とて遣はしけり。

かくて妹尾兼通【司馬欣】は、六波羅の館に参りて、執権泰長高に、対面を乞ひけるに、長高は由を聞て、心の内秘かに喜び、さて人をもて、兼通に言はするやう、「この頃は勤め繁くて、速やかには対面しがたし。しばらく休息し給へ」とて、中門の内に旅宿を宛て行ひて、その妻子にだも会はず、次の日に至りても、絶えておとづれもなかりしかば、兼通深く訝りて、中門を守る雑色らに、物を贈りこしらへて、長高がとみに会はざる、事の心を尋ね問ふに、その者ども嘯き答へて、先に近習



(21ウ・22オ 兼通、長高の真意を知る)

の輩しよがらが、主君に聞こえ上げし事、又長高が、答へ申せし事の趣、この故に長高は、妹尾らを深く ▲右の下へ ▲左の上より 恨みて、害せんと謀る事、人の噂に聞たるまゝに、事しごと云々と告げにければ、兼通いたく驚きて、「しからんには我うかくと、この所に日を送らば、つひに長高に謀られて、不思議の罪に落とさるべし。とく柚山

雑兵「さういふ訳とは知らずして、うかく〇〇

みたらおいらまで、どのやうな目に遭はふも知れぬ。恐いこと〜。

通(兼通)「すりや何もかも彼の佞人ねいじんが、中ちゆうにて計らふ悪あくだくみ。それでやうやく分かりました。我らは今より秘かに発足はつそく、疾く柚山へたち帰らん。沙汰のあるまで穩便えんべんに、知らぬ顔して後々あとあとの、首尾をよろしく頼むぞや。

雑色「そこらに如才じゆさいはござりませぬ。返すくもかの事を、我らが言ふたと寝言ねごんにも、噂うわさして下さりまするな。ドリヤ一いち回り回つて来やうか。

にたち帰りて、親に告げばや」と思案しつ、供人を急がし立てて、秘かに越前へ帰りけり。

○かくて秦長高は、兼通を待たせ置く事、既に三日になりしかば、「今はしもよき頃なり。さらば彼奴に對面して、**次へ**(21ウ・22オ)／言葉尻を取り罪に落として、

妻子諸共獄屋に繋がん。兼通捕らはれぬと伝へ聞ば、兼安は、我が子を救はんとて、招かずも帰り来てん。その折兼安・経久を、搦め捕らん事は易かるべし」と、腹の内に思案をしつ、やがて人を遣はして、兼通を呼ばせしに、「兼通は昨日の真昼ごろ、柚山へとてまかり発ちぬ。今は一夜を経て候へば、追ふとも及び候はじ」と、告ぐるに長高足ずりをして、「さては機密を気取られしか。油断して兼通を、走らせしこそ口惜しけれ。しかりとてこのまゝに、うち捨て置くべき事にあらず。兼安ら三人を、召し返して計らふ由あり。さは」とてやがて忙はしく、御教書を用意しつ、すなはち己が従兄弟なりける、尾並次郎五朝風【趙常】といふ者を説使と称へ、事の機密を囁き示して、柚山へ遣はしけり。

さる程に、妹尾小太郎兼通は、夜を日に継ぎて、柚山へ帰り来つ、すなはち親と経久らに、長高が悪事の趣、六波羅の雑色に、聞たる由を云々と、こと詳らかに告げにければ、兼安は経久と、面を合はし呆れ果てて、しばらくは物も得言はず、やうやくに心を静めて、経久らにうち向かひ、「今さら悔やみて返るにあらねど、前に木曾の剛敵あり、後ろには又、佞人の讒言あり。進退こ、に谷りぬ。さていかにせん」とばかりに、遺恨やる方もなかりけり。

◆兼安、去就に迷う

それよりして第三日に、尾並次郎五朝風、六波羅の説使と称へて、供人数多従へつ、柚山の城に来にければ、兼安・経久・兼通らは、腹巻の上に、礼服を整へて、出でて説使を迎へけり。その時尾並次郎五は、上座に坐を占めて、兼安らにうち向かひ、「各々説意の趣を、謹んで承られよ」と、言ひつ、懐にさし挟みたる、御教書をおし開きて、

「妹尾小太郎兼安、小次郎経久、

妹尾小太郎兼通らを、早く召し返すべき事

右兼安らは、逆賊義仲を征伐の為、大軍を授けられ、

討手の大将を○右の下へ／＼○左の上より承りなが

ら、謀拙うして、しばく敗軍に及び、多く軍兵

を失ふて、北国を賊に得させし事、言語道断といひつ

べし。これにより、兼安ら三人の、敗将を召し返して、

別に討手の大将を、遣はさるゝもの也。まづそれ

までは、朝風仙山の城を守りて、籠もる所の士卒を

預かるべし。兼安らは、速やかに帰り上りて、罪に

伏すべき条勿論なり。御誕によつて執達件の如し」

と読み終はり、「いざ／＼、拝見あられよ」と、言ひつ、

御教書を渡すにぞ、兼安怒りに堪へずして、取るより早

く御教書を、づたく／＼に引裂き捨てて、飛びかゝりつ、

朝風が、襟髪掴み押し倒して、膝にひき敷き声ふり立て

て、「我々主君の御為に、家を忘れ矢石を冒し、大敵と

戦ふて、死を顧みざるものは、子孫の栄えを思へばなり。

しかるに何ぞや長高は、君を欺きて太平と称へ、ひとへ

に遊興を勧め参らせて、国の大事をおし隠し、却つて忠

臣を害せんとす。この御教書も我が君の、御心よりは出

でずして、長高が手作りならん。汝も悪人の親族なれば、

恐るべき者にあらず。覚悟をせよ」と罵りて、小き刀を

引抜きつゝ、刺し殺さんと次へ(22ウ・23オ)／＼したり

しを、経久・兼通おし止めて、「御憤りはさる事なれど

も、今さら誑使を殺し給はゞ、佞人いよく便りを得

て、謀反の証拠にせらるべし。命ばかりは助け給へ」と、

言葉等しく諫めしかば、兼安わづかに怒りを静めて、腹心

の兵に、朝風を縛めさせ、厳しく獄屋に繋がせけり。

◆辛川正雁、説客となる

○かくて兼安はさらに又、経久・兼通らと談合するやう、

「加勢の軍兵来たらずして、兵糧もやゝ乏しくなりぬ。

か、れば久しくこの城を、守る事も叶ひがたく、出でて

戦はん事もなりがたし。所詮武運尽きたる我々、今さら

にせん方なし。城を枕に腹かき切つて、忠義を泉下に尽

くすべし。各々思ふ由あらば、教え給へ」と言ひかけて、

左右をきつと見返れば、兼安が腹心の侍に、辛川江五郎

正雁【陳籬】と呼ぶる者、「御無用御無用」とおし止



(22ウ・23オ 兼安、朝風を殺さんとする)

めて、末坐ぼつざより進み出で、「事の難義に身を置きかねて、

腹を切らんと思ひ定め給ふは、忠義の優れしに似たれど

も、君暗くして佞人時を得たり、忠義の為に死し給ふと

も、恐らくはその甲斐なく、却つて妻子を罪せらるべし。

何ぞ木曾殿に降参して、今の禍わざはひを避け給はざる。某それがし

使つかひを承りて、事を整へ候はん。この義に任せ給へかし」

久（経久）「その朝風を縛めおいて、都へだに帰さ

ずは、今殺すより増す由あらん。短慮の計らひ

御無用々々々。

通（兼通）「はやり給ふな親人様。そやつを殺さば

刃やいばを穢さん。まづくしげらく、御料簡りやうけん々々々。

風（朝風）「詭使を殺さば九族を、誅伐せられん五

逆の罪人。兼安気でも違ふたか。○／○皆止め

ぬかへ、あ痛いたへく。

安（兼安）「主君を化かす狐ども、この朝風めも一

つ穴あななる、猪むじなに等しき畜生侍。首かき落とす

ぞ、覚悟をせよ。

と、言ふに兼安頭をうち振り、「和殿の意見よしといへども、先に才明が謀により、我兼遠を討ち取りにき。か、ればこの恨みによりて、義仲降参を許すべからず。無益の詮義にあらずや」と、言ふを正雁押し返して、「危ぶみ給ふはさる事ながら、かの権守の当の仇、才明は既に討たれたり。たとひ木曾殿執念く恨みて、しばし降参を許さずとも、三寸不爛の舌をもて、説かば憤りの解けざらんや。かくても事の整はずは、その折に又○右の下へ／＼○左の上より分別あるべし。只某に、うち任せ給へかし」と諫めしかば、兼安この義に従ひて、すなはち芋川正雁を、義仲の陣へ遣はしけり。

○かくて江五郎正雁は、義仲の陣に赴きて、兼安らが、降参の事の趣、一部始終を演説して、ひたすら許容を願へども、義仲怒りて受け引かず、「兼安は我が叔父の仇なり。我生きながらその肉を、食らはんとのみ思ふ也。今その勢ひ窮まりて、降参を願ふとも、いかにして許すべき。疾く／＼まかり立すや」と、言葉鋭く追ひたつるを、正雁恐る、気色なく、「君もし平家を滅ぼして、武

家の棟梁たらん事を、思し召すものならば、私の恨みを捨てて、この義を許し給へかし。それ万卒は得やすくして、一将は得がたし。兼安味方に参りなば、虎に翼を添ゆるが如く、羊に似たる六波羅を、滅ぼさん事容易かるべし。よく／＼賢慮を巡らし給へ」と、言へども義仲なほ睨まへて、受け引く気色なかりしかば、覚明進み出で、義仲に囁きて、「申上げたき由あれば、しばらく正雁を退け給へ」と、言ふに義仲領きて、「芋川江五郎しばらく退け。我又思案を巡らさん」と、言ふに正雁は心得て、遠侍へ次へ(23ウ・24オ)／＼罷りけり。

その時覚明は、義仲を諫むるやう、「よく大業をなす者は、私の恨みを思はず。早く兼安らが、降参を許し給へ。叔父君の怨敵だにも、許して用ひ給ふ由を、世の人知らば皆喜んで、君に従はん事を願ふべし。これ大業の成れる也」と、言ふに義仲心とけて、又正雁を呼び出だして、すなはち兼安らが降参を、許すべき由を答へて、矢を折て誓ひとなし、偽りなき由を示せしかば、正雁すなはちその矢を携へて、杣山へ立帰り、義仲許容の事の



(23ウ・24オ 正雁、兼安に降参を勧める)

趣、偽りならぬ誓ひの征箭を、兼安らに見せてありつるまゝを、云々と告げにければ、兼安らは喜びて、正雁を

通(兼通)「恨みは尽きぬ長高が賢しら。かやうな

時に所存を包まず、申さるゝが日頃のよしみ。

首尾整へば重畳でござんる。

安(兼安)「それは何よりよさそうな、談合ではあるけれど、とても得心はせられまいてや。

久(経久)「さう思ふなら御大義ながら、一あたり当たつて見るも、ようござらう。

正(正雁)「ハテ聞かれずはそれ迄の事。案じ過しをしようより、先の胸をも探つた上で、又料簡もござりませう。

(左上。義仲、正雁の申し出を拒む)

仲(義仲)「くどい。〇〇城攻め落とすは瞬くひま。兼安はじめ皆殺し。たち帰つてこれらの由を、申聞かせよ、不承知じやぞ。

▼他に忠政・正雁・覚明。



(24ウ・25オ 妹尾兼安、義仲に従つ)

勞ひけり。この時城に残りし、軍兵五万余人あり。その中に、故郷へ帰らんと、願ふ者は婦し遣はし、兼安すなはち士卒に下知して、獄屋に繋ぎおきたりける、尾並。次郎五朝風が、頭を刎ねてこれをもたらし、正雁をしるべとして、兼安・経久・兼通ら三人、木曾の陣門に来たり下りて、助命の喜びを述べしかば、義仲対面してこれを慰め、その日杣山の城に入りて、軍民を安んじけり。

仲 (義仲) 「いづれも降参、神妙々々。

ひぐち (樋口) 「これと申すも我が君の御武徳。

ねの井 (根井) 「まことにめでたい義でござります。

覚 (覚明) 「尾並朝風が首、イザ御実檢あらせられませ。

▼覚明の前方に朝風の首。

安 (兼安) 「逆を去つて順に従ふ、□/□我々が喜

び、御前よろしくおとりなし、○

久 (経久)・通 (兼通) ○「ひとへに頼み入りまする。

この事都へ聞こえしかば、秦長高いたく怒りて、兼安・經久らが、妻子眷屬を搦め捕らせ、皆悉く殺しにけるを、程経て袖山へ聞こえしかば、兼安らは悲しみに堪へず、西に向かひて涙を注ぎ、「いかで恨みを返さん」と、思へば義仲にしばし勸めて、「早く都へ攻め入り給へ」と、三人等しく逸りしかども、覚明これをおし止めて、義仲に申すやう、「平家の運命傾けども、いまだ容易く滅ぶべからず。君九度戦つて九度勝ち給ひ、兼安



(25ウ) 矢作豊氏、歴世を推挙する

ら三人の、大将を下し給ふ事、古にもためし少なし。一度凱陣してこれらの由を、宮に聞え。○右の下へ○左の上より上げ給ひ、重ねて大軍を起し都に上りて、平家を討ち滅ぼし給へ。只今は時なほ早し」と、ひたすらに諫めしかば、義仲この義に従ふて、討ち取りし城々には、守りの士卒を残し置きて、兼安らを従へつ、やがて信濃へ凱陣して、しばらく人馬を休めけり。

◆頼朝、彦岐歴世を招く

さる程に、前兵衛佐頼朝主は、先に藤沼のほとりにて、平家の大軍を追ひ走らせしより、進みて駿河を討ち

朝(頼朝)「自ら功を貪らで、賢を薦むる○／○志、賞すべし。」

天の(天野藤内)「それは何より御忠節。喜ばしう存じます。」

とよ(矢作左衛門)「歴世は年寄り候へども、学問弁舌類稀なり。お役に立ちさうな者でござります。」

従へしに、いさ、かも民を損なはず、よろづ仁義の行ひをもて、その所を利したりければ、国人ら皆喜びて、従はずといふ事なし。これよりして遠江に攻め入る程に、その道すがら城を守りし、平家の武士らは悉く、城門を開きこれを迎へて、降参する者多かりけり。

かくて又、三河国にうち入る程に、矢作の守将、矢作左衛門豊氏【王徳】、頼朝の徳を伝へ聞て、戦ふの心なく、城を出でこれを迎へて、式なき志を表はしけり。頼朝これを喜びて、都へ攻め上るべき、謀を尋ね問ふに、豊氏答へて、「某、才短くして、さやうの御用に立ちがたし。当国豊橋のほとりに、壹岐庄二歴世【酈食其】といふ、武士の浪人あり。和漢の故実を諳んじて、弁舌の学者也。よりにその名を音に唱へて、歴世先生と号したり。この者を用ひ給はゞ、御為によろしき事あるべし。某、一面の交はり候へば、いかで御使ひを承りて、招き寄せ候はば」と、まめだちて勧めしかば、頼朝喜び斜めならず、「しからは件の歴世先生を、▲右の下へ ▲左の上より誘ふて来よかし」とて、次の日矢作左衛門を、

件の使ひに命ぜらる。

かくて矢作豊氏は、供人わづかに従へて、歴世が宿所へ赴きけり。
(25ウ)

(六)

かくて矢作左衛門豊氏は、壹岐庄二歴世が、宿所に至りて対面し、しきりに頼朝の武徳を褒めて、その身降参の由を告げ知らせ、「某既に佐殿へ、先生の事を聞え上げて、勤め申せし也。いざ某と諸共に、件の御陣に赴きて、日頃の志を述べ給へ。可惜しき学問を、持ち腐らしにする事かは」と、言ふを歴世は聞あへず、「そは言はる、事ながら、世の風聞にて

▲中へ

▲上より伝へ聞



(26ウ 豊氏 歴世を訪れる)

しに、佐殿は儒学を好まず、儒者を侮り給ふといへり。しからば我が身年老いて、且貧しきに見落とされ、軽んぜらる、事もあるべし。我この故に行きがたし」と辞むを豊氏押し返して、「先生何どて胸狭きや。佐殿は人に奢る、癖あるに

○下へ

○中より

似たれども、もとより寛仁大度にして、容れ給ふ事海の如し。且古の人の言葉

にも、名を聞くは面を見るにしかず。面を見るは名を聞くに勝れりといはずや。か、れば一度見参して、従はんとも次へ

(26オ)

／ 従はじとも、そはその折の便宜によりべし。人の噂をのみ信じて、自ら捨つる事かは」と、

まめやかに論せしかば、歴世は遂にその義に任して、豊

ふる(歴世)「これは、珍らかなる御来臨。お

通りなされと申した所が、御覧の通りの侘び住まひ。縁側が崩れてをります。御用心なされませ。

とよ(豊氏)「ちと折入つて話もござれば、わざ

／ 出かけました。御在宿で重畳々々。



(26ウ・27オ 歴世、頼朝の態度に憤る)

氏に伴はれ、やがて源氏の陣に来にけり。

この時、頼朝は給仕の為に、召し置きたる女子共に、足を洗はしてをせしが、「只今矢作。豊氏が、老岐歴世を、将て参りし」と聞ながら、取り繕ふ事もなく、そがま、対面せられけり。

その時歴世は頼朝の、礼なきを見て近くは進まず、遙かに声を励まして、「いかに佐殿、和君は平家を滅ぼして、世を救はんと欲し給ふか、平家の悪行を見習ふて、世に疎まれんと欲し給ふか。願ふ所はいづれぞや」と、

朝(頼朝)「サアくずつと、これへく。

とよ(豊氏)「でもそれは余りに失敬。さてもく困つたものだぞ。

ふる(歴世)「非礼見る事なかれ、非礼聞く事なかれとは聖の教え(『論語』顔淵)。礼義を知らぬ大将に腰を屈める、歴世ではござらぬぞ。小姓「あの親父は、杖でも飲んで来たか知らぬ、

□/□滅多無性につ、はり返るはへ。

問へば頼朝うち笑ひて、「我は平家を滅ぼして、君の宸襟を安め奉り、民の塗炭を救はんと、欲するのほか他事もなし。それを今さらに問ふ事かは」と、言はれて歴世はちつとも擬義せず、「和君仁義の戦をもて、平家を滅ぼさんと欲し給はゞ、何どて長者を侮りて、辱めんとし給ふぞや。およそかくの如くならば、世の中の賢人君子は、和君に従ふ事を恥じて、下風に立つ者あるべからず。まことに沙汰の限り也」と、言ふに頼朝驚きて、忙はしく身を起こし、やがて衣裳を改めて、席を正しくして対面あり、「先には無礼の爲体を、さぞ烏滯也と思はれけめ。そはいさ、か先生を、試みんとてのわざ也。果たして人の噂に違はず、身一つにして、大軍の將たる我が威に恐れざりし、かの一言をもて先生の、先生たる所以を知れり。教え給へ」と懇ろに、慰めらるゝ歴世が喜び、席の進むを覚えぬまでに、治乱の理を説き、成敗の方を論ずるに、弁舌水の流るゝ如く、世の優れ者と見えたりければ、頼朝喜びて陣中に留め、をさゞ軍議に与らせしかば、歴世はその恩を感じて、頼朝の使ひと称へ、設案の

城に赴きて、城守に説きて降参せしめ、一国源氏に属せしかば、頼朝ますゞ愛で喜びて、すなはち歴世を重用ひて、軍師にせんと言はれしを、歴世は辞みて受け引かず、「某が如き者は、いまだ明君の師とするに足らず。○右の下へ／＼○左の上より都人に、前齋宮次官親良【張良】といふ者あり。彼はもとの亜相成親卿に仕へて、世々彼の家の家令たり。成親卿、先に配所にて身まかり給ひ、その御子、丹波少將成経朝臣【韓王】、鬼界島より召し返されて、上皇に仕へ給ひしが、近ごろ院の御計らひによりて、今は尾張の国司たり。これによりて親良は、又成経朝臣に従つて、尾張の国府にあり。そもく件の親良は、和漢の学軍陣の法、諳んぜずといふことなく、思慮深くして謀あり。まことに経済の才子にして、多く得がたき優れ者也。平家は古主の仇なれば、恨みを返さんと、思ふ事大方ならず。この人をだに用ひ給はゞ、天が下を定めん事、容易かるべく候」と、言ふに頼朝頷きて、「我もその親良が、才ある由は伝へ聞たり。和殿尾張へ赴きて、こしらへて見よかし」と、言はれて歴世

は頭を傾け、「御誕では候へども、成経新たに国司となり給ひて、かの国に事多し。よりにて親良は、彼処を立ち去るに忍びざるべく、成経朝臣も親良を、放ちやり給ふべからず。つきて次へ(26ウ・27オ)／＼一つの謀あり。御書を成経朝臣へ遣はされて、『兵糧一万俵を、貸し給はるべし』と仰らるべし。成経朝臣その書を得て、兵糧を貸す時は、平家の崇りあらん事を危ぶみ、貸さざる時は、源氏の大軍に、攻め討たれん事を恐るべし。しからば親良を、使ひとして御陣へ遣はし、事を両端に寄せて、辞まんと図るなるべし。その時君は、斯様々々に計らひ給ひて、『もし兵糧を貸しがたくは、親良を借りて、軍議の助けにせん』と求め給ふ時は、成経朝臣は辞むに言葉なく、親良も、逃るゝに道なくて、そのまゝ陣に留まらるべし。この義はいかゞ」と囁き申せば、頼朝甘心斜めならず、「その義もつともしかるべし。しからば先生を勞せん」とて、件の書状を書き認め、やがて歴世に渡し給へば、歴世はこれを受け取りて、供人兩三人従へつゝ、尾張の国府へ赴きけり。

◆頼朝、親良を借りる

かくて歴世は府城に至りて、国司の家臣に由を告げ、成経朝臣に見参して、頼朝の書状を参らせ、壹万俵の兵糧を、借らんと欲する由を述べけり。その時成経は、件の一通を開き見て、うち案じつゝ、眉を擧め、「佐殿の求めを今さらに、辞むにはあらねども、我らは国司の事にしあれば、武家の領主と同じからず、かゝれば府城の兵糧を、私に貸さん事、最もなしがたき所也。まづよくこの義を察せられよ」と、辞むを歴世は押し返して、「それは仰では候へども、全て法式を守り給ふは、これ太平の時にあるべし。いはんや御父成親卿は、平家の為に御命を、落とさせ給ひし事なれば、共に天を戴かざる、仇敵に候はずや。しかるに今佐殿は、義兵を起こし平家を討ちて、上皇の宸襟を、安め奉らんと欲し給ふに、崇りを恐れ身構へして、求めに応じ給はずは、佐殿▲右の中へ／＼▲左の中よりその不義を怒りて、大軍をもて当城を、攻め取らんこと近きにあらん。よく／＼御思案あれかし」と、言ふに成経困じ果てて、「しからば和殿退き



(27ウ・28オ 親良、頼朝への使者となる)

て、しばらく道の疲れを憩へよ。我よく思案を巡らして、
返答に及ぶべし」と、応へて歴世を退かせ、譜代の長臣、

ふる（歴世）「畢竟御主人の御為にも、親の仇たる

平家を滅ぼす、兵衛佐の義兵の兵糧、一万俵や

二万俵、でけぬとは申されますまい。

良（親良）「いづれにしても、某がまかり出でまし

て、御直談をいたしませう。御即答は御用

捨々々々。

成（成経）「先生の言はるゝ趣、もつともにはある

けれど、この方にもいたく逼迫。ほとんど難義

いたすさかひ、推量していんでたも。○／＼面

目もない事じやはいの。

侍「聞けば儒者だといふ事だが、この掛け合ひは、

○／＼齋宮次官殿でなければ、大刀うちではけ

ぬのさ。

侍「何分やかましい親父と見える。押し寄せられて

は恐れるく。

齋宮次官親良を招き寄せて、「この事いかゞしてよからん」と問ひ給ふに、親良頭を傾けて、「公家の国司と知りながら、頼朝遙々書を寄せて、兵糧を借らんと言はるゝは、故ある事に候はん。某御使ひを●／●承りて、歴世と共にかの陣に赴き、ともかくも言ひこしらへて、彼の人の怒らぬやうに、無事の計らひを仕らん。御心安く思召されよ」と、言ふに成経喜びて、再び歴世に對面して、「佐殿の頼みの一条、辞むにはあらねども、実に当城も兵糧少なし。これにより、家臣齋宮次官親良を遣はして、罪を詫びんと思ふ也。和殿親良を伴はゞ、たとひそのこと整はずとも、使ひの落ち度になるべからず。この義を心得給へかし」と、言はれて歴世は秘かに喜び、「すではや謀の、成りぬ」と次へ(27ウ・28オ)／

「**続き**」思へば一義に及ばず、やがて親良を伴ふて、頼朝の陣に立帰り、こと云々と告げにければ、頼朝聞て衣裳を改め、広元【蕭何】・善信【曹參】を従へて、親良に對面す。

その時親良は膝行頓首しつゝ、初めて頼朝の面を見る

に、まことに威あつて猛からず、相良堂々として、英雄の気性あり。「武家の棟梁たらん者、この人なるべし」と思ひしかば、心の内に、甘伏しつゝ、さて言ふやう、「此度主君成経へ、御書を寄せさせ給ひて、兵糧を求め給へども、成経只今預かる所の、兵糧も亦乏しくして、人に貸すべき余分なし。これにより、家臣齋宮次官親良を遣はして、不便の由を申し説かしむ。この義賢察し給へかし」と、言ふに広元進み出でて、親良にうち向かひ、「先生さのみ弁舌をもて、欺かんとする事なかれ。我その心を推したり。今兵糧を貸す時は、平家の咎めに遣はん事を恐れ、貸さざれば源氏の大軍に、攻められん事を」

○上へ／○下より恐れて、首鼠兩端にあやなすのみ。まことに兵糧乏しくして、貸しがたきにはあらざるべし」と、詰れば親良につこと笑みて、「我も亦佐殿の、胸中を察したり。兵糧は名のみにて、まことはこの親良を、借りて軍議に与らせんと、謀り給ふにあらずや」と、星を指れて頼朝は、忙はしく坐を立ちて、親良が手を携へて、我が片方におし上し、「既に明察せらるゝ如く、実は兵



(28ウ・29オ) 親良、頼朝と対面する

糧に望みなし。只先生をこゝに留めて、事を議せんと

右の下へ / ▲左の上より欲するのみ。願ふは我らを助け

導き、共に大業を圖り給へ」と、他事なき頼みに親良は、

身をへりくだり額をつき、「数ならぬ某を、しか思し召

すならば、いかでか辞み申すべき。平家は古主の仇なれ

ば、いかで恨みを返さんと、思ふ事久しけれども、今の

朝(頼朝)「先生の高名は、雷の耳に轟く如く、疾

くより承知の事なれば、渴望いたしてまかり

ある。これを一期の縁にして、何分頼まねば

ならぬてや。

ひろ(広元)「親良軍師となり召されば、鬼に金棒

茶飯にくつ煮。注文通りで大慶々々。

良(親良)「平家はもとより古主の仇。主君成経の

許しあらば、及ばずながら犬馬の□/□力

を、尽くしますでござりませう。

ふる(歴世)「ちつくり骨を折り甲斐あつて、早速

うまく参りました。

主君 ○左りへ／○右より成経朝臣も、長袖の事にしあれば、かゝる上には頼もしからず。早く主君に由を告げて、乞ひ求め給へかし」と、言ふを次へ(28ウ・29オ)／頼朝諸ひて、次の日軍兵を進めつゝ、幾日もあらで尾張なる、国府の城に着き給へば、成経朝臣出で迎へて、兵糧整ひがたき由を、わびて士卒を勞ひつゝ、厚く頼朝をもてなしけり。

その時頼朝は、成経にうち向かひて、「頼み奉りし兵糧の、当城にも乏しき由、是非に及ばざる所也。しからば御家臣親良を、しばらく借用いたしたし。勇士は数多候へども、和漢の学問に才長けて、よく兵法を諳んぜし、親良が如き者は、一人も候はず。いかで軍師にせまほしけれ。この義を許し給へかし」と、乞れて成経辞むに由なく、「親良は譜代の郎党、手放しがたき者なれども、兵糧を貸し参らせぬに、彼が事までは辞みがたし。軍陣のこと果てなば、その折返し給へかし」と、応へて親良を呼び近付けて、「佐殿懇望し給へば、汝しばらく陣中に、従ふて勤めよかし。もちろん軍陣のこと果てなば、

早く帰り参るべし」と、示さる、主命に、親良は心得て、これより頼朝に従ひけり。

◆頼朝、平康頼を招く

かくて亦成経は、頼朝に告ぐるやう、「先に某らと共に、鬼界嶋に流されて、某らと共に赦免にあふたる、平判官康頼【随何・陸賈】は、近頃烏髻の、世捨て人となりて、美濃の青墓に退隠し、自ら随我道人と号し、又陸賈居士と号して、草の庵を結びつゝ、君の先考義朝朝臣の、菩提を弔ふて侍る也。彼も和漢の学者にて、弁舌優れし才子也。招き給はゞ参るべし」と、いと詳らかに示されて、頼朝喜び大方ならず、美濃へ使ひを遣はして、康頼を招くに、果たして康頼出で来たりて、頼朝に対面す。その時頼朝は康頼が、人に勝れし志を、褒めて○右の中へ／○左の上より来し方を物語り、「御辺は和漢の才長けて、弁舌の士なりと聞く。大丈夫たらん者、空しく世捨て人となり果てんや。速やかに還俗して、某を助け給へ。乱れたる世をうち収めて、国民を救ひなば、その功德限りなかるべし。曲げてこの義に従ひ給へ」と、



(29ウ・30オ 平康頼、頼朝に仕える)

懇ろに勧めらるゝを、康頼は受け引かで、二度三度辞みしかども、広元・善信・親良らも、言葉等しく勧めしかば、康頼逃るゝ道なくて、これより頼朝に従ひけり。

▼原作では、陸賈・随何の劉邦への出仕は語られない。

朝（頼朝）「昔のよしみを忘れずして、我が父の亡き跡を、甲はれしは殊勝の事。とてもものに頼朝に、仕へて大功を立てられよ。これに増したる功德はあるまい。少将殿、さやうではござりませぬか。

な（成経）「さやうとも〜。

ひろ（広元）「賢人才子の追ひ〜に、世に出づる

も□/□これ君の徳。恐悦至極に存じます。

やす（康頼）「否と言はれぬ御懇命。お受けいたす

も何とやら、当惑いたしをりますてや。

良（親良）「かやうな対面談合の、画組みばかり続きまするも、『漢楚』の筋なればと、御推量下さりませ。

◆仁田四郎、頼朝に従う

○かくて頼朝は、齋宮次官親良と、随我先生康頼らを従へて、十万余騎を三手に分かち、
○右の下へ／＼左の中より尾張の府城をうち発ちて、都を指して攻め上るに、行く事いまだいくばくならず、たちまち向かひの森の内より、一人の武者の、わづかに十余人の、雑兵を従へたるが、まつしぐらに馬を駆け寄せ、「佐殿に見参せん」と、声敵めしく呼ばはるにぞ、先陣に進みたる、平山武



(30ウ) 仁田四郎、平山武者所と争ふ

者所季重【樊噲】いたく怒りて、「何者なれば我が君の、

仁義の戦を遮りて、無礼をいたす不敵さよ。そこな退き

そ」と罵りて、馬にかくいれ乗り出だし、人混ぜもせず

件の武者と、時移るまで次へ(29ウ・30オ)／戦ひしが、

季重勝ちを取る事あたはず、既に危うく見えしかば、親

良馬を乗り出だして、件の武者にうち向かひ、「何者な

れば我が君に、●／●見参せんと言はる、ぞや。その訳

聞かん」と呼ば、れば、件の武者も声ふり立て、「我は

佐殿に見参して、申すべき一条あり。他し人には要な

し」と、言ひつ、なほも戦ふ程に、頼朝○右の下へ／＼○

左の上より既に近付きて、「前兵衛佐こ、にあり。何者

仁田(忠常)「ぶつかけ蕎麦の平山でも、俺が手打

ちで□／□どつさり切り麦。いけ慳貪など恨む

なよ。

平山(季重)「どつこいさうは奈良晒。二反はおろ

か三反でも、□／□この季重は男一匹。徳用向

きだぞ、覚悟をしろ。

なるぞ」と問ひ給へば、件の武者は忙はしく、馬より飛び下り兜を脱ぎて、恭しく跪き、「某事は仁田四郎忠常【灌嬰】と呼ばれる、者也。京難波の、案内を知つたれば、御先手に、加らん事を願ふものから、身内に知る人なきにより、かたの如くに計らひぬ。かくて身内人と戦ひしは、武芸の程を見せ奉らんと、思ふばかりに候也。無礼を許し給へかし」と、身をひれ伏して詫びにけり。

（30ウ）

（かんだ・まさゆき 法学部准教授）